

お茶を楽しむ！—— 未完の美

慶應義塾大学 名誉教授

鷲見成正 (すみ しげまさ)

「カニッツアの三角形」で知られる図1は、変化の無い様な面上に鮮やかな三角形が認められることから主観的輪郭と呼ばれている。この図が発表されるやその衝撃は大きく、毎日どこかで研究発表が行われているともいわれるほど人々の関心を集めた。イタリアの著名な知覚心理学者カニッツアは、主観的輪郭が現れるためには不完全な図の存在が不可欠で、その効果は図2のような完全図の配置では弱まるか消失すると説明する。この考えは、ちょうど「未完の完」の心的な働きを探っていた私を魅了した。

岡倉天心は名著 *Book of Tea* (1906) の中で、「不完全を完全に導く心の働きの中にこそ美は生まれる」と説いている。わが国では古くから「未完の完」について詳しく論じられていた。十分に保護され温室で育った草木には均整のとれた完成美が備わっている。一方、野に置かれ風雨にさらされて育った草木には、きわめて不恰好ではあるがしっかりと根を張り強風にも耐え得る強靭さがその内に秘められている。この野にある草木の不恰好さを愛で慈しむ日本人の心は優れた盆栽芸術を生み出した(図3)。わが国の未完美学に初めて触れた西欧の芸術家は、完全を拒むその意図の意外さに驚きを禁じ得なかったのである (Sumi, 1994)。

私は「茶の本」のイタリア語版をカニッツア先生に贈った。先生から早速お礼のことばと「素敵なお茶を共に楽しもうではないか」と記された自著と画集をいただいた。カニッツア先生と親しい野口薫氏の協力と日本心理学会の許しが得られて機関誌 (*JPR*) に特集号 (第36巻第3号) を出すこととなった。カニッツア先生自らも投稿してこれ、国内外から23篇の原稿が集まった。しかし編集途中で先生急逝の知らせを受け、一同驚きと悲しみに包まれたのである。カニッツア先生は世に知られた点描画家でもあることから(図4)、作品集の展示を兼ねてぜひとも日本に招待したいというわれわれの夢は残念ながら実現に至らなかった。しかし主観的輪郭を通じての深い結びつきは今日もなお失われていない。



Profile — 鷲見成正

1964年、慶應義塾大学博士課程修了。文学博士。慶應義塾大学、日本女子大学、帝京平成大学で教授を歴任。専門は知覚心理学。著書は『見てわかる視覚心理学』(共著、新曜社)、『錯視の科学ハンドブック』(分担執筆、朝倉書店) など。

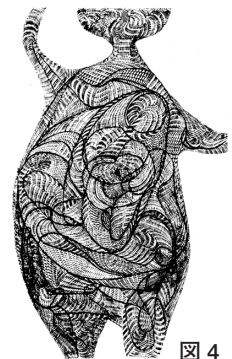


図4

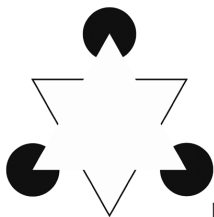


図1

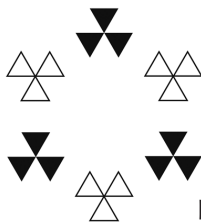


図2



図3

図1~3はSumi (1994) *JPR*, 36, 109-112.からの転載で、図4はGalleria Schubert版カニッツア画集からのものである。なおこの画集は出版社の許可を得て「故カニッツア教授追悼論文集(1996年)」に収録された。